

## 平泉古図からみた地域空間構成の理念

山 田 安 彦

### 平泉都市の歴史的背景

「北方の王者」といわれるのに相応しい奥州藤原氏は、北上川中流右岸の平泉の地に根拠地を置いた。時は一〇九〇年代で初代清衡が江刺郡餅田つくだの豊田館から奥州統一の拠点とするために磐井郡のその地に居館を移したのである。

在地豪族の安倍氏や清原氏の遺産を血縁内の激しい鬨恨の繰り返しにより継承した清衡は、陸奥と出羽の押領使として実権を把握していた。しかしまだ一介の押領使に過ぎなかった清衡は、新権勢を把握するために畿内京都の撰関家と結合を有し、京都の中央政権との連繫を緊密にして、京都文化の導入に努力した。その結実のまず一つが、二十有余の歳月をかけて建立した中尊寺である。一一二六年（天治三〓大治元年）に落慶供養された。

二代目の基衡は着々と奥州藤原家の権力集中を確立し、国衙領に対して強硬であり、撰関家に対しても抵抗的姿勢を構えた。なお基衡は中尊寺よりも大規模な毛越寺建立に着手、三代目秀衡の代に完成した。徐々に権勢を蓄積した基衡は、陸奥と出羽にあった撰関家の五荘園の年貢増徴の要請を拒絶したので、撰関家は一一五三年（仁平三年）の

不本意な協定に応じなければならなかった。

奥州藤原氏の権勢は、遂に平泉政權として成長した。ところが京都の中央政權や院政もこれを無視しえずして、むしろ利用的方向に認めた。三代秀衡は一一七〇年（嘉応二年）五月に鎮守府將軍となり、一一八一年（治承五年）養和元年）八月には陸奥守となった。一一八三年（寿永二年）に秀衡は頼朝を初め東国源氏を追討する役割が与えられていた。しかしその三年後、すでに鎌倉政權を樹立していた頼朝の勧めにより、鎌倉を経由し京都と友好関係を保持しようとした。そして秀衡は宇治の平等院を模した無量光院を建立した。

ところが、一一八七年（文治三年）二月に、頼朝と不和の状態にあった義経を秀衡が受け入れたことが、契機となつて平泉と鎌倉は相對する事態を迎えた。この年の十月に平泉では不運にも秀衡が病没している。

四代目を継承した泰衡は、頼朝の軍勢が迫ってくるまでに義経を高館に襲つて自害させた。それでも泰衡は頼朝に追われ、逃走しながら助命を乞うたが、裏切りの家臣河田次郎に討たれ四代一世に亘つて栄えた奥州平泉政權は脆くも滅亡した。時に一一八九年（文治五年）のことであった。平泉政權の經濟的基盤の一支柱には砂金と鉄と馬産とがあつた。しかし、この財力だけでは真実の戦力ではなかつた。

鎌倉政權は武士団を基礎としていたのに、平泉政權はもつと古い族長的な支配關係にあつた。やはり前者の方が一歩進んでいたといえるのであろう。

### 〔平泉古図〕研究の意図

平安中期以降になると、律令国家体制は變質し、地方行政機構は弱体化して秩序や治安は乱れていた。その隙間に

乗じて、辺境の奥州に族長的支配の国家的体制を形成したのが、奥州平泉政権である。その拠点である平泉都市は十一世紀末から十二世紀末期にかけて約一世紀は奥州に黄金文化を築いた。しかし、鎌倉勢の前には脆弱であった平泉権勢は徹底的に破壊され、滅亡後は僅かに金色堂とその周辺にかつての面影を留めるのみに過ぎない。ここに残存する遺構や若干の史料から当時の様相を推論することが可能である。

かつての様相を推察すると、多くの謎が秘められている。何故、北上川中流右岸に僅か一世紀ぐらいだけ黄金文化を誇ったのか。黄金と馬産を特産とするならば、奥州平泉藤原氏が滅亡したあとも、都市として復興する筈であろう。それなのにあれだけの黄金文化を誇ったにも拘らず往年の姿に戻らなかった。藤原氏滅亡後の陸奥の黄金はどうなったか。その一世紀間の奥州藤原政権の財政的基盤を維持しうる黄金は何処で産出されたのか。陸奥小田郡の黄金<sup>(1)</sup>にわが国で初めて金を産したというのは、歴史的には著名であるが、平泉文化を支えるだけの黄金を産出したのであろうか。また説話に残っているような多量の黄金を奥州藤原氏は何処から入手したのか。それだけの黄金を産出すると知られておれば調として徴収されなかったのか。後述するが『続日本記』にもあるように黄金を輸したのであるが、しかし、もし産出量の割合に応じて調としてそれを徴収されていたとすれば、その残りで平泉財政を支えられたのであろうか。当然そこに、中央政権との間で摩擦があったと考えられる。勿論、貢金<sup>くま</sup>や荘園の年貢問題の係争はあったが、奥州藤原氏統治時代には律令体制が弱体化していたので、その問題が歴史的に大きく浮上していなかったのかも知れない。それらは素朴な疑問であるが、未だ明確な解答はない。また仏教的文化の基盤が確立していなかった平泉に、突如として仏教導入し、しかも僅か一〇〇年位の間には壮大な規模の伽藍や数多くの塔頭を建立し絢爛たる仏教文化を定着させた莫大なる財力と、またその文化内容を享受する潜在的土壌と能力は何時、何処で培われ存

在していたのか。想えば限りなく多くの課題が潜在する。そのためにこそ従前から多方面に亘って、各分野から分析が加えられてきた。

それらの多くの謎を解明する能力は筆者にない。しかしそれらの謎を古代東北の歴史地理究明の背景におき、平泉の舞台を見たいのである。それらの課題を背景に意識しないのとは意識するのでは舞台構成理解には甚大な差がある。

奥州藤原一族が族長的支配体制のなかで、奥州という広大な領域を統轄するのに、平泉を本拠地とし、そこへ集中的に仏教文化施設を集積させているが、奥州藤原氏は如何なる理念をもって平泉都市を造成し、また地域空間を構成しようとしたか。その意義は何か。それらの点について追究したいと念願しているが、それは目標であって、この度本稿でそれをすべて解明しようとするのは困難であるから、その一部分だけでも究めようと考えている。しかしそれは東北への仏教滲透により、特定地域の地域構造の変容を把握しようとする端緒を探る試論にしか過ぎない。奥州藤原一族の東北への仏教導入の理念と地域空間構成との関連を究め、延いては十一世紀末から十二世紀末にかけての東北の地域空間構成の変遷過程と理念を把握したい。さらに具体的にいえば、その当時の宗教理念と行政管轄体制と地域空間構成の三者の関連を究めることによって地域の論理を理解しうるのではないかと考えている。これがまた本研究の現代的意義である。いうまでもなく本試論も、筆者が従前から進めてきた古代東北のフロンティア研究の一環をなすものである。

### 「平泉古図」の意義

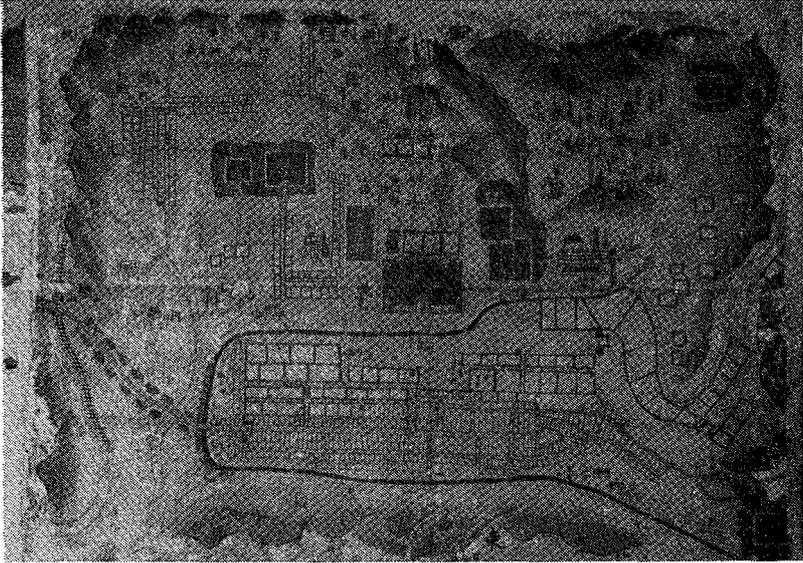
平泉藤原政権下の地域空間構成を究明するのが、本研究の意図であるが、それにはまず基礎的作業として、奥州藤原

一族が平泉都市を創建し造営した地域計画の理念を探求する必要がある。それを推進するには、当時の地図を分析するのが最も適切な手段ではなからうか。ところが鎌倉勢によって灰燼と帰した平泉は、平泉藤原政權下当時の地図を一枚も残していない。唯一枚、当時のものではないが、室町時代末期、東北では葛西氏が隆盛時に平泉藤原政權下の平泉都市を想定複写した古図がある。幸いにも遺存したこの古図のみが、平泉藤原政權下の平泉都市を推測させてくれる。

その件の古図は関山中尊寺塔頭利生院所蔵のもので、永正年間（一五〇四—一五二一）に複写された絵図（縦一尺一寸・横二尺五寸八分）であろうと伝えられている。この古絵図はすでに『大日本史料』第四編之二に掲載されている<sup>(2)</sup>ので遍く知るところである。

ところが、昭和五三年春の本会研究発表大会において筆者が口頭発表した際、この古図の所蔵を明らかにし、かつまた発表要旨（本会会報 九八号 四四頁）にも明記し、さらに当日発表会場で配布した筆者の発表資料にも所蔵を明記して、さらに配布資料に掲載した写真のコピーは平泉町役場観光課提供のものであることも説明した。それにも拘らず、所蔵をいってほしいと所見をのべている方がいるが、筆者は何回もそれを繰り返し説明しておくべきであるかも知れない。

なお、最近平泉関係の史料や宝物は近代的保管設備を整えた中尊寺讚衡堂に集中管理保管されているときく。そこには大正一〇年三月に（複写）印刷したと註記している「平泉古図」が展示されている。その複写古図が『日本莊園絵図集成』下巻に写真撮影されて掲載されている<sup>(3)</sup>。その複写絵図は三三、三cm×六八、二cmの図幅面積を六、七分の一位に写真縮小して掲げられているので、大正一〇年三月印刷、大正一〇年三月発行の文字が小さくて所見者には読みとれなかったためか。その写真の古図と比較して、筆者が本会大会発表当日配布した発表資料に掲載した「平



伝永正年間複写平泉古図写真

縦1尺1寸 横2尺5寸8分 関山中尊寺塔頭利生院蔵 平泉町役場観光課提供

「平泉古図」と違うと所見者はいう。筆者の掲載した写真は永正年間複写原図の写真であるが、『日本荘園絵図集成』掲載のものは、大正一〇年に模写複写したものである。当時はまだ写真複写技術が発達していないので、古図原図を模写して複写印刷したものであるから多少原図との相異がある。所蔵所在と古図の相異についての所見があったので、蛇足ではあるが説明を加えることにした。

「平泉古図」については、一一八九（文治五年）に源頼朝が奥州を平定した後、頼朝は葛西清重を陸奥国御家人奉行に任命した。その後葛西氏によって、奥州藤原氏統治下の平泉都市の景観を想定復原し絵図化した。それを基にして永正年間に複写されたといわれる<sup>(2)</sup>。しかし、この絵図の作成年代は永正よりも下るものであろうという説も<sup>(3)</sup>ある。

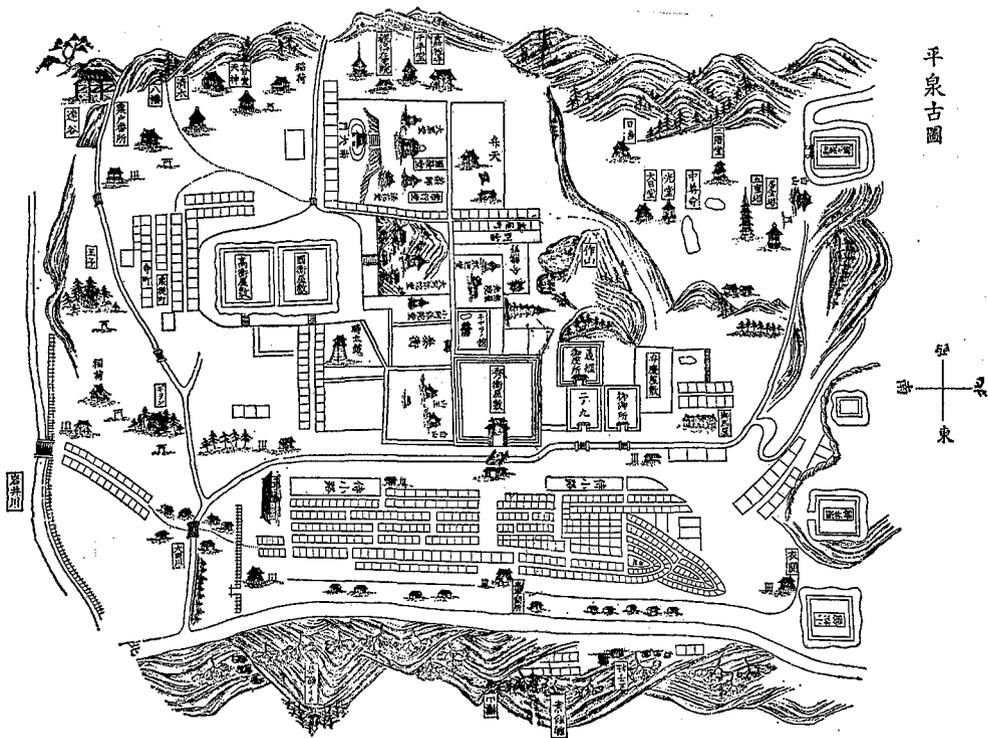
さて本稿でこの古図自体について吟味検討しようとするのではなくて、ここでは一応永正年間作成の平泉復原

想定絵図と認めて、それを参酌し、合わせて『吾妻鏡』・「中尊寺供養願文」・「毛越寺金堂円隆寺古鐘銘」、および『古蹟類纂』所収の『地名選』などの記載内容を検討し、奥州藤原氏の平泉を中心とした地域計画を分析し、地域空間構成の理念を追究することにある。なお、それに加えて発掘報告や考古学的資料、および筆者の臨地調査資料などからもそれを分析する。さらに平泉の都市景観や北上川その他の河川流路の変遷については、空中写真の解析を用いて当時の地域計画考察の一手段とした。

### 「平泉古図」の都市景観

「平泉古図」の作成年代は一応そのままにして、この古図の平泉都市景観描写の信憑性について、極めて高いというには躊躇する。「平泉古図」に描写された都市景観を精緻に吟味するには、それに関する史料も考古学的証拠も豊富でないので困難である。しかしまず平泉一帯を概観的に把握するために、平泉付近の空中写真を解析すると、平泉付近の北上川右岸の沖積平地には、図示したような激しい旧流路変遷が見られる。ところでその変遷の年代は推定しえない。唯、現代の北上川の甚大な常習的洪水被害から察し、過去の洪水防禦堤防施設の不備を合わせ推察すれば、平泉付近の北上川右岸沖積平地の洪水による流路変遷は容易に想像しうる。例えば一九四七年（昭和二年）と一九四八年に連続発生したカスリンとアイオン台風の豪雨による大洪水は、一関東方の狐禅寺地峡部により大規模な湛水の洪水を惹起した<sup>(4)</sup>。その洪水は平泉南部の一関市との境界線付近まで逆流的に押し寄せた<sup>(5)</sup>。この付近の河川状況と常習的洪水状態から、この古図に現われているように、北上川の平泉沖積平地全面に亘って待町や町屋が形成されていたのであろうかと疑いたくなる。絵図に描写されているように、北上川が左岸の駒形山（四三〇m）・観音山（三

平泉古圖

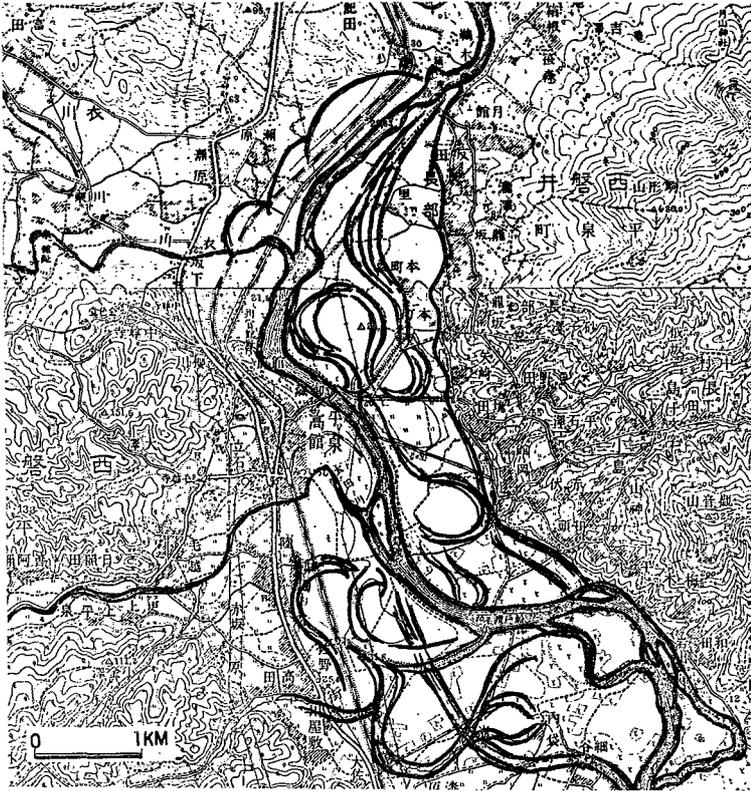


『平泉志』所収の「平泉古図」

二五m)の麓を流れ、右岸の比較的広い沖積平地に平泉都市が拡張していたとしても、奥州藤原氏統治時代に洪水に遭わずに存在しえたであろうか。もしその沖積平地に侍町や町屋が絵図に描写されているように存在していたとすれば、空中写真にみられる旧流路の変遷は、奥州藤原一族滅亡後であるということになる。奥州藤原氏統治時代の十一世紀末から十二世紀末期にかけての当時はまだ現代のように河川洪水防禦施設の堤防が発達していないので、洪水状態は現代よりも激しくかつまた甚大であったと考えられる。一般的に東北では大体三〇年周期の割合で大凶饑が発生している(4)ので、平泉政權下の約一〇〇年間には大凶饑が三回襲っていることになる。勿論それは凶饑頻度からみた想定である。その凶饑の要因は冷害・水害・地震津波、旱害などであって、洪水のみではないが、東北の場合、霖雨・台風豪雨による洪水発生が、それに加えて霖雨のために冷害が発生するという併発的災禍が惹起することが多い(4)。それで平泉政權下の平泉都市においても、災禍に苦悩した時が二、三度あったのではない。か。ましてや、北上川中流の右岸平泉沖積平地の標高は二〇—二一m前後であるから、大洪水を被る頻度数は非常に大であった。その平地に約一〇〇年間も平泉都市の侍町や町屋が存続したのであるか。この平地に現在存在する「里」・字「本町」の集落は標高二四m前後に立地している。

そのような状態であるから、平泉政權下の平泉では堤防技術が発達していたのではないかと想像される。そこで「平泉古図」に見られる平泉都市の侍町と町屋の周囲に施された黒線は洪水防禦の堤防ではないかと解釈する研究者もいる。しかし、果たしてカザリン・アイオン台風の豪雨によって発生したような大洪水を防禦しえたか否か疑問である。それだからといって「平泉古図」の描写は総て虚偽であるというのではない。

そのように「平泉古図」の都市景観描写について検討すべき点もあるが、一応この古図の景観を現在の地形図に位



空中写真から見た北上川流路変遷図

北：5万分の1地形図 水沢図幅 1951年応急修正測量

南：5万分の1地形図 一関図幅 1951年応急修正測量

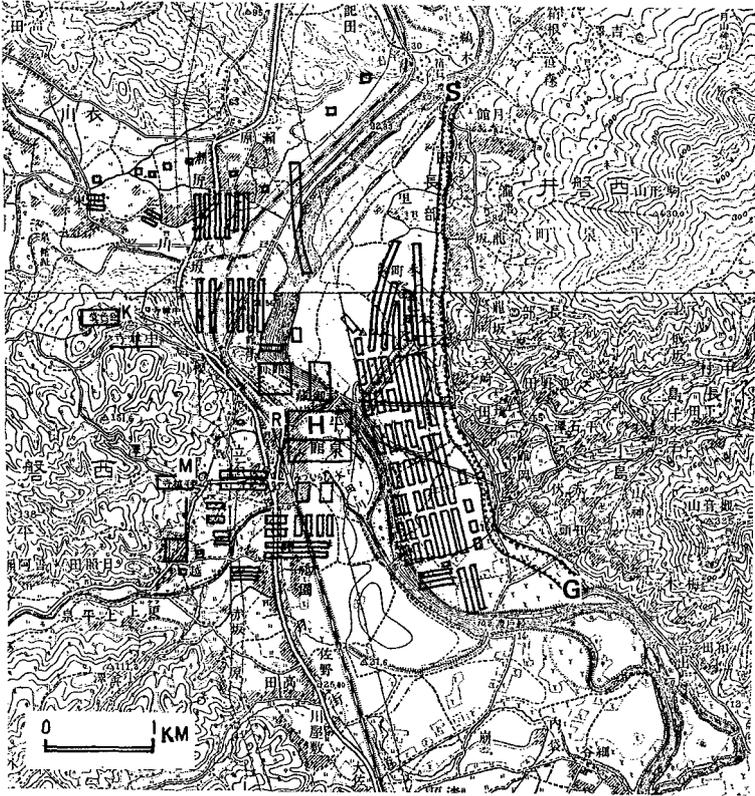
利用した空中写真は、TO-73-3x, C1~8・9・10・11, C2~8・9・10, TO-72-3x, C9~7・8・9, および383vv~M621-1 Nov. 47 (以下略)・384・385・386・421・422・423・487・488・489 などである。

置比定を試みたことがある。その具体的図化については、『地形図に歴史を読む』第二集に拙論「奥州平泉の都市遺跡(7)」、また『日本歴史地理総説』古代編には拙稿「平泉(8)」のなかに掲載されている。本稿ではそれとの重複を避けるために要点のみを記す。北上川右岸の平泉丘陵上に中尊寺金色堂を初め塔頭の大規模伽藍が位置し、丘陵中腹から麓にかけての斜面帯には奥州藤原一族の居館と附属施設が立地し、北上川の沖積平地には家臣侍町や町屋地区が配置されている。この配置を見て概観的にいえることは、関山中尊寺を核として東側の周辺に奥州藤原一族の居館を置き、その外延部に家臣と庶民の住宅地と町屋地区を配する。いわゆる東側に展開する半圏構造を構成する。

この古図は西を天として描き、図幅上部右側に中尊寺の金色堂を中心にして塔頭を配し、上部中央部左寄りに円隆堂を中心にして毛越寺伽藍を描き、それに続いて中央部に奥州藤原一族の居館地区を配置している。それらの景観描写が本絵図の主題であって、下半部に図化された待小路や町屋は抽象的な図案化図法で附加されている。やはり絵図作成年代(推定)より三三〇年余以前の歴史景観を想定して画いたものであるから、痕跡の稀薄になった部分はどうしても抽象的表現にならざるをえないのである。つまり前述したように、北上川右岸の沖積平地は氾濫原であり、空中写真で解析したように北上川の流路変遷が激しく、「平泉古図」に図化されたようには町屋が存在しなかったのではないかと思う。

東から鳥瞰したように描写したのは、上部に中尊寺と毛越寺、中央部に無量光院と藤原一族の居館を画くためであったということもあるが、また、平泉全体が東を向いているからでもあろう。

平泉が東向きであるというのは、中尊寺の核的存在である金色堂が東向きであり、その北西にある経蔵も東を向く。またこの絵図を見ても図面右から柳御所・二ノ丸・義経御座所・伽藍衆御所も隆衡館や国衡館も東を正面として



平泉都市比定図

北：5万分の1地形図 水沢図幅 1951年応急修正測量

南：5万分の1地形図 一閃図幅 1951年応急修正測量

「平泉古図」により奥州藤原政権下の平泉都市を現在の地形図に比定した。

K：金色堂，M：毛越寺跡，R：無量光院跡，H平泉館推定地，SG：桜川  
(北上川旧流路)

いる(9)。この東向きに意義がある。この意味内容については後述する。

これを『吾妻鏡』によると、文治五年九月十七日の条、「館事」(三五五頁)に、金色堂正方向、並于無量光院之北、構宿館、号平泉館(・点は筆者が附す)とあり、東方を正方向と呼んでいる。

さて再び古図を見ると、北部の衣川の流れ(6)が「瀬原」より南へ平泉丘陵の麓を流れ南部の太田川に合流する。この流路は平泉都市を北から南へ流れて恰も運河水路のような役割を果たしたことであろう。東方の東稻山・駒形山・桜山の西麓を南流する古図註記の「桜川」は北上川の当時の流路であった(3)(8)。しかしその後、流路を変え衣川の流路にも流入し、現在の北上川流路となった。つまり東寄りを流れていた北上川が平泉丘陵の麓の方へ西寄りになり、「高館」の地形を大きく浸蝕するようになったのである。

### 『吾妻鏡』に現われた地域空間構成

まず『吾妻鏡』文治五年九月十七日の条の「関山中尊寺事」(三五三頁)の項に

寺塔四十余宇、禪坊三百余宇也。

清衡、管領六郡之最初草創之。先自白河関、至于外浜、二十余ケ日行程也。其路一町別立笠率都婆、其面図繪金色阿弥陀像、計当国中心、於山頂立一基塔。又寺院中央有多宝寺。安置釈迦多宝像於左右。其中間開関路、為旅人往還之道。(・傍点と句読点は筆者が附し、文字も現代的に書き改めた。)

とある。

この記事によると、南は磐城の白河関から北は外ヶ浜(外の浜ともいう)まで南北に縦貫する道路に、一町毎に笠率都婆を建立したという。外ヶ浜とは率土の浜の意で、連続している陸地、つまり国の果ての辺土における海浜の意

味である。当時どこの海岸を指していたのかは定かではないが、現在では青森県東津軽郡三厩村みんまやの津軽海峡に臨む一帯の海岸、すなわち津軽半島の先端部一帯の海岸をいう。今ある地名と『吾妻鏡』に記載されている地名とが同一であるというには検討の必要がある。

なお清衡は当国の中心を計って、平泉丘陵の山頂に一基の塔を建立し、また伽藍の中央に多宝寺と二階大堂の大長寿院および中尊寺の核心的存在である金色堂を造営している（『吾妻鏡』三五三頁）。その笠率都婆は今日残存しているものは、まだ確認されていないが、奥州縦貫道路にそれを一町毎に建立し、その中心を計って塔を立て伽藍を建立したということは、清衡の奥州統一の念願的意志が深く存在していたことを物語る。またその念願が宗教を背景にして、奥州の安泰を確立するために象徴化され、奥州統一の理念が形而上的に現示されたものである。しかも関山に建立した二階大堂の大長寿院は九体堂であり、全国でも珍しく壮大なもので、京都では道長以来臣下にして初めて藤原顕季が九体堂として仁和堂を建立した時より僅か三年後にその大長寿院が造営されている<sup>10</sup>。都を速く離れたみちのくに、都のそれに勝るとも劣らぬ高さ五丈の大長寿院に、本尊三丈の金色阿弥陀如来の巨像を中心にして丈六の阿弥陀像九体を安置している。かかる豪壮な伽藍造営は奥州の泰平安穩を祈願する政治的統一理念の根本でもあろうが、また反面、対畿内対等姿勢の政治態度の表現でもあり、「北方の王者」としての文化的示威行為であろうとも考えられる。なお『平泉志』巻之下（五・六頁<sup>11</sup>）や同書添付の「平泉図」によると多宝塔は金色堂の北西にあったことになる。多宝塔のあった多宝寺は清衡の草創によるもので、最初院と称した。前述したように奥州縦貫道路の中心に平泉を設置し、しかも山頂に多宝塔を建設し、そこまでは一町毎に建立した笠卒都婆で導き、多宝塔の側に聳える大長寿堂の阿弥陀に礼拝させるように構成したのは、平泉中心の奥州統一の理念を象徴するものであり、また大長寿院に

丈六像九体を安置したのは、奥州統一の政治理念のなかに九品来迎思想を根底に受容していたのではなからうか。

一方『吾妻鏡』文治五年九月二十三日の条（三五七―三五八頁）に

於平泉巡<sub>レ</sub>礼秀衡建立無量光院給。是撰<sub>レ</sub>宇治平等院地形之所也。豊前介為<sub>レ</sub>案内者候御供。申云。清衡、継父武貞（中略）卒去後、伝<sub>レ</sub>領奥六郡（中略）去康保（嘉保か康和の誤記であろう）<sup>(12)</sup>筆者註<sub>レ</sub>△『平泉志』卷之上 一〇頁▽年中、移<sub>レ</sub>江刺郡豊田館於岩井郡平泉、為<sub>レ</sub>宿館、歴<sub>レ</sub>三十三年卒去。兩國<sup>(13)</sup>有<sub>レ</sub>二万余之村。毎村、建<sub>レ</sub>伽藍<sub>レ</sub>寄<sub>レ</sub>附<sub>レ</sub>仏性灯油田<sub>レ</sub>矣。（句読点は筆者が附し、文字も現代的に書き改めた）

とある。

右の記事によると、頼朝が平泉を巡検した際、案内した豊前介は清衡が継父武貞より奥六郡（伊沢・和賀・江刺・稗抜・志波・岩井）を伝領して平泉に居館を構えてから、陸奥・出羽の兩國に一万余の村に、村毎に寺院を建立し、仏性灯油田を寄付したと説明している。一万余の村という数値には多少誇張的な形容があるとしても、寺院を中心にして村落造営を計画したことは、延いては仏教理念に基づいて国土経営を推進しようとした清衡の意図が窺知しうる。

村落景観については、『吾妻鏡』の記事からは詳らかに知りえない。そこでその記事年代より約一三〇年後世の古図であるが、鎌倉時代末期の文保年間（一三一七―一三二九）の「陸中骨寺古図」<sup>(13)</sup>（平泉関山中尊寺讚衡堂架蔵）を参考にする。この陸中岩井郡骨寺村は平安末期から中尊寺経蔵別当領であった。しかし本図の成立についての直接的史料はない。ただ一三一八年（文保二年）三月の「経蔵別当領書立」骨寺村所出物日記事に関連がある。

この絵図は現在の岩手県一関市巖美町を流れる磐井川（旧石井河）の中流に形成された沖積層の谷平地の範囲を図化したもので、その平地を占める骨寺村の在家田地と在家を图示した地籍図にも相当するものである。この古図によると、僅か一三字しかない在家の村落に宇那根社があり、他に六所宮・骨寺堂跡・仏舎跡、また北東隅の山地に大師

堂がある<sup>(14)</sup>。文治年間と文保年間とは一二〇—三〇年の間隔があるが、推論の資料にはなる。したがって「骨寺古図」によると、『吾妻鏡』に記載されている「毎村建伽藍」(三五八頁)ということは無視しえないのである。

なおこの陸中「骨寺古図」も西を天とした絵図である。この作図法は、「平泉古図」が然りであり、この他陸奥国「毛越寺古図<sup>(15)</sup>」(丸井氏勝茂筆。江戸時代作か。平泉関山中尊寺讚衡堂所蔵)、および同じく平泉中尊寺所蔵の「中尊寺山内古絵図」(寛永十八年八月二十二日)もすべて西を天に描写している。それらの絵図は各々作成年代を異にするが、申し合わせたように西を天に画いている。前述したように平泉の場合、東を向いていることに意義があるようである。繰り返すいうが、『吾妻鏡』文治五年九月十七日の条によると、「平泉館」の位置を表示するのに「金色堂の正方」(三五五頁)という表現であり、金色堂を基準にしている。すなわち金色堂が平泉の核心的存在であることを意味する。

この金色堂についても意見が分れる。それは阿弥陀堂として建立されたものか。あるいは阿弥陀堂として創建された後に、葬堂となったのか。それとも最初から葬堂として建立されたのか。それらについて論議があり<sup>(16)</sup>、論定されてはいない。それにしても中尊寺境内の主要堂塔の中心部に遺体を永久に保存する葬堂を敢えて配置建立したのは何か。しかも度々説明するように『吾妻鏡』によると、平泉都市の方位の基点にしている。したがって奥州藤原一族の中心的居館である平泉館を金色堂の正方(東方、正確には正東から南東約三〇度)に配置するという『吾妻鏡』の表現法には、金色堂と平泉館との密接な関係の意味する。しかも平泉館は正方(東方)を向いており、再び述べるが「平泉古図」によると柳御所・二ノ丸・国衡館・隆衡館も、また義経御座所も東方を向いている。唯、泰衡館は北向きである。さらに平泉館の東門(正門)の大体東方延長上に舟手関所があった。これは平泉都市の河川交通水運の玄関口

に当たる(6)。

東方を主要方位として正方とする理念は、平泉だけでなく、東南アジアのビルマのマンダレー王宮のなかでも見られる。この王宮では、東方を主要方位として南(右)と北(左)に二分する原理がある。この概念は王を日の出時の太陽と同一視することに由来する(17)。また中国の『六国表』には「東方物所<sub>ニ</sub>始生、西方物之成就」という考えもあり、太陽信仰と深い関係がみられる。

奥州藤原氏の初代清衡が、奥州という統治領域の中心的位置に、本拠地平泉を設置し、その核心に関山中尊寺を建立し、そのまた中心に大長寿院と金色堂を造営した。そして奥州を南から北へ縦貫する道路に笠率都婆を一町毎に建て、村落にも村毎に伽藍を造営したのである。これは要するに、仏教理念を根底に置き、一切の人を救う阿弥陀の浄土思想、九品来迎思想を核とする圏構造を現実の地上面に地域計画構想として象徴化したものであると考えられる。

### 笠率都婆の伝承

『吾妻鏡』に記載するように、白河から外ヶ浜まで一町毎に笠率都婆が建立されたのならば、一一三基ぐらい遺存していてもよさそうであるが、しかし明確に調査されたものはまた管見に入らない。唯、僅かに福島の白河の近くに起点であった笠率都婆が残存しているといわれるが(18)、筆者はまだ確認していない。それについての精緻な調査が進んでいても正式に報告されていないものもあるかも知れない。また志和高水寺(岩手県紫波郡紫波町)の大道祖神社も清衡の勧請によるものと伝えられている(18)。

なお吉田東伍著の『大日本地名辞書』の奥羽篇の羽前南置賜郡ひろはた広幡村(一九五四年∥昭和二九年一〇月一日米沢市

に編入) 小菅こすげの小菅神社の項目に、『米沢事蹟考』から引用し、小菅村の明神は今の虚空蔵堂であるといい、加えて『吾妻鏡』に奥州平泉の笠率都婆の記載があることを述べ、小菅(現代の米沢市北部)の山上より北東の屋代村落に至るまで五六基の笠率都婆があることを説き、恰も清衡が白河から外ヶ浜までの奥州縦貫道路に建立した一町毎の笠率都婆に類似するように説述している(19)。そこで筆者は臨地調査(20)に行つたが、遂にそれを確認しえなかつた。唯それに類するものを見出したが、笠率都婆の年代が異なる。

そこに遺存する笠率都婆は三基である。建立年代が異なるのに、さらに追及する契機になつたのは、小菅の微かなる伝承に、奥州藤原氏が建立した笠率都婆があるということである。調査しているうちに小菅に遺存する笠率都婆が奥州藤原一族によつて建立されたものと錯誤される史料が存在することがわかつた。本研究と若干の関連があると考へるので、参考までに掲げておくことにする。

その史料というのは、江戸時代末期に近い頃一八〇四年(文化元年)十二月、米沢藩の家中であつた小幡忠明の編著『鶴城地名選(米沢地名選・米沢事蹟考)』である。それは現在では『米沢古誌類纂』に収録されている(21)。

そのうちの『米沢地名選』(二七—三八頁)「石碑部」(二七頁)の「境界碑(芝蓋なる故俗に笠率都婆と云)」の項目には、

上長井小菅の山より東山上へ村々里々往々歴行して、屋代郷に至る迄、五六基残れり。又、城の西南田畝の際、外郭巷街の中にもあり。猿ヶ町徳正寺前の碑文字亡て見へす。唯、小菅山の半腹にある二碑の内、南一基は文字亡するも、北一基は僅かに、無官、当位、寛治等の字見ゆれとも、紅葉半は埋て払へとも亦積り、青苔字に食んで殆と辨するに由なし。もし是歐陽に非れとも誰か馬を駐めて歎せさらん。夫、寛治は軍に任せられし時、小菅山に碑を立て、山南を奥州とし、山北を出羽とし、石の笠率都婆をそ立てけり。是は、父清衡 白河の関より往々外か浜迄其道一町毎に石の笠率都婆を立し例に倣へりとかや。

とある。

さらに次の「笠卒都婆」(三七―三八頁)の項目に

寛治五年、奥州後三年の合戦に武衛家衡滅亡の時、藤清衡(奥州平泉高水寺の鎮守明神は此靈なり)大功あるに依て、鎮守府將軍に補せられ、奥州六郡を管轄するの最初、草創に先白川の関より外か浜に至り二十余か日の行程なり。其路一丁毎に石の笠卒都婆を立る。其面に金色の阿弥陀の像を図繪す(東鑑是に同じ)。其後陸奥出羽一同に押領し、其後基衡奥羽の疆界に石の笠卒都婆を立る。其面に金色の弥陀の種字を彫付しなり。是は父清衡追福の爲なりと云々。石の高さ七尺許、又五尺許、其面に弥陀の種字(梵訓古利俱)古は吉の誤字であらう。筆者註)を勒、或は仏像を彫る。日本雜記に米沢と唱ふ時は、奥に入れ、置賜と云時は羽に入ると往々見る処なり。(漢字・仮名ともに筆者が現代的に書き改め、句読点と傍点も筆者が附した。)

とある。

右の『米沢地名選』の記事内容から置賜郡広幡小菅に、出羽と奥州の境界線として寛治年間に石の笠卒都婆が建てられたと伝えられてきた。しかも、それは奥州藤原氏の二代目基衡が父の初代当主清衡の追福のために、父清衡の遺業であった白河から外ヶ浜までの奥州縦貫道路沿線一町毎に笠卒都婆を建立した事業に倣ったものであったと『米沢地名選』の編著者である小幡忠明は考えた。そのように小幡が推論した根拠は詳らかではない。唯一つ、小幡が記している笠卒都婆面上の碑銘文字の「寛治」は一〇八七年から一〇九四年の年号であり、二代目基衡が父清衡を相続したのは、一一二八年(大治三年)であるから時代的に矛盾がある。なお「寛治」と銘記文字を判読したのも誤読であったかも知れない。

その伝承の対象になったと思われる石碑を訪ねてみた。それは米沢市広幡地区「下小菅」の字「西方」の国道二八七号の西側沿道に一基と、その南方約八五〇mの「上小菅」の字「大沢」の同じく国道二八七号線から西へ約一九〇

m入った俗称「小菅山」の山麓に二基遺存する<sup>(22)</sup>。それらは仏龕式笠率都婆でその石質は石碑表面の風化が甚しくその上に苔が覆っているので判定は困難であるが、石英粗面岩質凝灰岩であるといわれる<sup>(23)</sup>。前者は風化甚しく、後者も二基のうち南のものは二〇余米離れて横倒しであり、風化のため碑銘文字は明らかでない。後者の北にあるもののみ、その銘刻はあるが、判読は極めて困難である。その高さは約一・五mであり、卒都婆正面に二基の種字が刻印され、それは約一・〇五の高さにある<sup>(22)</sup>。その碑銘は先学によると、正面向って右の種字が胎蔵界の大日如来であり、その下に「諸行無常 是生滅法 生滅々已 寂滅為樂」の銘文が二行に銘刻されている。一方、正面向って左の種字に阿弥陀があり、その下に「右志者為 逆修善根也」の二行の銘文がある。その両種字と銘文の左下に延文己亥□□の刻字がある。この判読は初めに一九三二年(昭和七年)八月に当時の福島県立福島中学校教諭の堀江繁太郎が調査し拓本によって解説が行われた。さらに一九四五年(昭和二〇年)一〇月にそれを高橋堅治が判読した<sup>(23)</sup>。その後、最近では元広幡小学校校長の高橋勝郎が広幡の郷土史を調査研究し、この笠率都婆の碑文解明にも及び、「延文己亥」の下に「八月八日」の銘刻があることを追加された<sup>(24)</sup>。

この銘文にある「延文」は北朝年号で、「延文己亥」は延文四年のことであり、西暦一三五九年である。南朝年号では正平十四年に当たる。当時の置賜は京都方の足利氏に属していた長井氏の統治下にあった。この銘文によると建立目的は逆修善根のためである。このことから米沢北西部の広幡小菅に遺存する仏龕式笠率都婆は<sup>(25)</sup>、『米沢地名選』に記載されているような、奥州藤原氏の二代目基衡の建立した笠率都婆ではないといえる。

このように置賜地方にまで奥州藤原氏の建立した笠率都婆の伝承が残るということは、奥州藤原氏の遺業を称えようとすることが広まったのではなからうか。



上図 2.5万分の1地形図 米沢北部図幅  
1973年測量

下図 5万分の1地形図 米沢図幅 1952年  
応急修正測量

下図内部の枠は上図の  
範囲を示す。丸印は仏  
龕式率都婆の所在位  
置、Eは延文己亥銘文  
残存の仏龕式率都婆、  
Hは広幡小学校の位置。

米沢市北郊小菅仏龕式率都婆の分布図

つぎに、米沢広幡小菅の仏龕式率都婆で注意すべきことがある。清衡が沿道の一町毎に建立した笠率都婆の形態は明確に把握しえないが、『吾妻鏡』文治五年九月十七日の条、「関山中尊寺」の項によると、笠率都婆の正面に金色の阿弥陀像を図絵している(三五三頁)。今仮りに広幡小菅の仏龕式率都婆のように碑面正面に胎蔵界大日如来と阿弥陀を刻鏤していたとすれば、清衡が笠率都婆を建立した意義について前項で論じた余分に、さらにつきの意義が考えられる。率都婆は五輪を表現したものであり、すなわち宇宙の五大要素である地水火風空を象徴したものがある。なおそれは万物を哺育する大日如来のシンボルとして崇拜された。その本来の意義のように、広幡小菅の仏龕式率都婆にも正面右に大日如来を形象化し、左には一切の人を救済する誓願を立てるために阿弥陀を彫像している。

要するに、『吾妻鏡』に記載したように、奥羽の南から北まで縦貫道路の一町毎に笠率都婆を建立し、その面に阿弥陀像を図絵したことは、清衡の奥州における政治的統一の形而上的現示であるとともに、政治的統一の理念を仏教理念に基づき、地域空間構成を考えた。その一つとして領域内を隈無く整然と阿弥陀仏の加護により万民を救済し浄土化しようと計画したのである。これは清衡以前はいつも畿内からの干渉により奥州は争乱の荒土と化したので、清衡は自分が奥州を統一することにより戦乱のない泰平安穩を祈願していたと思う。そのためにも一切の世界の萬物を哺育する慈母である大日如来も笠率都婆に象徴化されたのではないかと考えるのである。

#### 平泉都市における位置選定

##### 『吾妻鏡』の平泉の位置

度々繰り返し説述するが、『吾妻鏡』によると、奥州の白河から外ヶ浜までの縦貫道路沿線の一町毎に笠率都婆を

建立し、その中心に当たる平泉の山頂に一基の塔を建立し、また寺院の中央に多宝寺を造営した。その左右に釈迦多宝像を安置し、その中央に閼路を開き、旅人往還の道路とした。これは清衡の奥州統一の象徴であることは、前述した通りであるが、一町毎の笠率都婆で奥州中央の平泉に導き、南北道路への基点として中央に中心的目標めざしである塔を立て、その近くの大長寿院の阿弥陀仏に礼拝させようとした構成は仏教理念に基づく国土経営の地域構成である。また同時に、藤原権勢の平泉集中化をも意味する。

一方、閼路を平泉に導入したこと（『吾妻鏡』三五三頁）は宿場町的な性格を有することにもなり、一面地形上からみて、北奥羽への入口を扼する要衝の地であるということにもなる。

なお、歴史的経過からみると、清衡が奥州全土を統一するのに、江刺郡岩谷堂いわやどうの豊田館では政治的行政上の立地的条件が適当でない。あるいはまた母方の安倍氏の日本拠地であった衣川界隈の近くに本拠を構える方が事情がよくわかっていたのかも知れない。

その他平泉の経済的基盤の一つに砂金・砂鉄・馬産があるが、平泉の近くにそれらの産地が分布したとは簡単にいえない。今直ちにそれら産地の分布を把握出来ないのである。

古代東北に産金は『続日本紀』七四九年（天平二十一年）二月二十二日の条に「陸奥国より始めて黄金を貢す<sup>(26)</sup>」と記録されて以来、陸奥の産金は有名である。同年四月朔日には陸奥国守百済王敬福は小田郡に黄金を産出したことを奏し献った。同四月十四日には天平感宝元年と改めている<sup>(26)</sup>。その産金地の陸奥国小田郡は今の宮城県遠田郡涌谷黄金産に比定されている<sup>(1)</sup>。この他産金地は明確になっていない。その後も陸奥の産金は伸びたのであろう。『続日本紀』七五二年（天平勝宝四年）二月十八日の条には、「陸奥国の調庸は多賀以北の諸郡に黄金を輸さしむ。その法、

正丁四人に一兩。以南の諸郡は旧に依て布を輸さしむ<sup>(27)</sup>。」と規定されている。その後『延喜式<sup>(28)</sup>』によると、「交易雜物」として納めるようになり、年間納付の砂金は三五〇兩の規定であった。このように陸奥に相当の産金があったことは推察しうるが、具体的産地は詳らかではない。

同様に砂鉄も奥州に相当な産量はあったと推考される。『延喜式』兵部省によると武器器仗を生産している<sup>(29)</sup>。陸奥は甲・横刀・弓・征箭および胡縵の生産量は多い部類で、伊勢・武蔵・常陸と全く同額である。なお伝承ともなっているが、考古学的調査の報告によると、平泉の対岸、すなわち北上川の左岸一関市舞草に製鉄遺跡があり、平安末期の刀鍛冶遺跡であった<sup>(30)</sup>という。

奥州の馬が良馬であったことは、『延喜式』「主税 上」の「馭馬直法」によって推察しうる。具体的にいえば、上馬が六〇〇束に相当するのは陸奥だけであり、五〇〇束の値をするのは出羽・常陸・下野・信濃であるに過ぎないのである<sup>(31)</sup>。平安中期を過ぎれば、陸奥国から度々交易馬が貢進されている。

このように奥州に産金・砂鉄・産馬を相当に産出していたことが察せられるが、具体的な産地分布を把握しえない。当時としては極めて貴重な産物を奥州において豊富に産出したので、平泉政権の財政の基盤となり、また奥州の中心的位置に本拠地を設置したのである。試みに地図上で測定すると、直線距離でみれば白河関と津軽半島の中心が平泉であり、平泉を中心にして南の多賀城と、北の厨川柵とは大体同じ距離である。

#### 「供養願文」による平泉の位置

平泉を理解するためには『吾妻鏡』は勿論のこと、「中尊寺供養願文<sup>(32)</sup>」をも考察しなければならない。この「供養願文」についてはすでに東北史の専攻部門から吟味検討が進められているので、それによる<sup>(33)</sup>と、中尊寺造営は

清衡の悲願でもあった。それは「願文」のなかに秘められている。「願文」の深層には清衡の前半生が昇華されているのである。悲惨な前九年の役によって、清衡は幼時に敗戦という悲運に遭ったが、一命は救われた。しかし父は惨刑に処せられ、母は敵方の清原武則の嫡宗武貞に再婚したので、清原家で養育されたのである。成人してから、後三年の役により妻子一族を失い、また悲劇の極致といへべき惨害に耐えた。なおその二回の争乱によって、平穩に暮らしていた数多くの家臣をなくしたことも耐え難い悲痛な苦悩であった。かかる苦悩を体験した清衡なればこそ、それら多くの冤霊を浄土に導くために中尊寺を建立するのは悲願であった。またその建立の目的は、仏教理念によって此岸の現世を彼岸の浄土世界に接近させようと祈願するためでもあったと思う。

さて「供養願文」(四頁)によると、冒頭に国家鎮護の大伽藍を建立し供養し奉ると録し、つぎに二階鐘樓を建立する理由として、

一音所覃千界不限、拔苦与楽、普皆平等、官軍夷虜之死事、古来幾多、毛羽麟介之受辱、過現無量、精魂皆去他方之界、朽骨猶為此土之塵、毎鐘声之動地、令冤靈導淨刹矣。(筆者が句読点を附し、漢字は現代的に書き改めた)と述べている。

すなわち、鐘音の及ぶところ千界に限らず、拔苦与楽、あまねく平等である。官軍夷虜の事に死するもの古来幾多。精魂は他界へ去り、身は朽ち果てたが、鐘音が地を動かすたびに、罪なき靈魂を浄土に導かしめようというのである。

ここで注意すべきは「冤霊」という語彙である。前九年と後三年の両戦役において、空しく多数の敵味方相方が戦没したが、それは罪ある故に死んだのではなくて、罪のない死である。つまりしなくてもよい戦であったことを暗に

主張し、畿内の中央政府に対して静かなる抵抗を秘めているようにも思われる。そのことは「供養願文」を通覧して感じられるし、また基衡・秀衡の代になっては対等の姿勢がみられる。ここで飛躍するのを慎まなければならぬが、古代の都京が南を正方としているのに、平泉だけは東方を正方にしたのも、南の畿内に向くことを潜在的に好まなかったのではなからうか。

さて話を元へ戻すが、時代は末法思想の世であるから、仏教理念に託して現世を浄化しようと考え、都市面積の割には数多くの堂寺を建立したのであろう。このことがとりもなおさず、畿内京都と同等同質の文化を培うことになると考えたのであろう。これがまた清衡初め奥州藤原一族の命題でもあった。平泉形成の深層的要因には多種多様の要因が絡んでいるようである。このように考えれば、平泉は仏教信仰によって形成され発達した宗教都市ではなくて、仏教理念に基づいて、現世の地域を計画策定し、彼岸の土地たらしめんとする浄土化思想を統治政策の理念とする政治的行政都市であったというのが適当であらう。

つぎにこの「願文」の第二の主旨は、中尊寺境内の造園景觀設計についての意味である。

この願文のやや中程に（五頁）、

築山以増地形、穿池以貯水脈、草木樹林之成行、宮殿樓閣之中度、広楽之奏歌舞、大衆讀仏乘、雖為傲外之壘、可謂界内仏土矣。（文字は筆者が現代的に書き改め、句読点も附した。）

と記されている。

これは願文の性格上、多少文章に儀礼的表現があると思われるが、自然の撰理に合った土地改造をして、生態系に沿った景觀を造成する意味であり、樹林や建築物も条理に合致した整備と配置をして、辺境を浄土化しようとした。

これにも清衡の悲願達成への執念が窺われる。この理念は結局、仏教理念に基づいて、自然の摂理や神の意に反しないように地域を改造し整備する地域計画の根本理念を表徴したものと受けとれるのである。

このことはさらに「供養願文」内の総括的主旨となつて発展し、平泉形成の基盤となる。「願文」の総括的段落の中程に（六頁）、

占<sub>三</sub>吉土<sub>二</sub>而建<sub>三</sub>堂塔<sub>一</sub>、冶<sub>三</sub>真金<sub>二</sub>顯<sub>三</sub>仏經<sub>一</sub>、經藏鐘樓大門大垣、依<sub>三</sub>高築<sub>二</sub>山<sub>一</sub>、就<sub>三</sub>窪穿<sub>二</sub>池<sub>一</sub>、竜虎協<sub>レ</sub>宜即是四神具足之地也、蛮夷僻<sub>レ</sub>善、豈非<sub>三</sub>諸仏摩頂之場<sub>二</sub>乎。（漢字は筆者が現代的に書き改め、句読点も附した。）

と記述している。

前述の願文の段落では、景観設計の内容が説述しており、仏教理念に基づく地域計画策定の意図が説かれていた。しかしここではさらに位置選定の要因までを論じている。方位条理に適った土地を占って堂塔を建立し、真金を治りて仏經を顯わす。經藏鐘樓大門大垣、高きに依りて山を築き、窪きについて池を穿つ、竜虎宜しきに協い、すなわちこれ四神具足の地なりという。かかる中国の宇宙論的哲理や陰陽五行思想を京都經由で導入したか、それとも直接に日本海經由で、あるいは北方經由で受け入れたのか不詳である。竜虎とは竜・虎・鳳凰・龜・蛇の五動物であるが、方位と合わせ配置すると、東方を青竜（竜）、西方を白虎（虎）、南方を朱雀（鳳凰）、北方を玄武（龜、蛇）といい、また星座を当て嵌めることも行われた。この地相は官位・福祿・無病および長寿を併せ有するといわれている。したがって、それらに相当する地形を選び、そこに都京を立地させる。「願文」によると、平泉の地は四神具足の奥州中央の瑞相であるという。四神相応の土地を選定して都京を設置することは、国家鎮護と国民の泰平安穩を祈願するためである。これからみても、四神相応の土地を選定した藤原・平城・平安の諸都京に平泉が倣ったものである。清衡は

願文の総括的段落の冒頭に「以前の善根の旨趣は、偏に鎮護国家の奉為なり」と述べている。これは畿内政府の国家鎮護のことを唱えているようであるが、奥州の中央でしかも四神具足の地を選定して平泉を設置し、その核心部に前述の大長寿院を建立し、丈六の阿弥陀像九体を安置してその中央に三丈の本尊を祀ることなどは平泉を奥州藤原政権の国家体制を意識しての国家鎮護の祈願であるようにも考えられる。

ともかく、古代の都市立地選定には四神相応の土地を理念としたことが普及していたようである。平泉は「四神具足」の土地とはいえ、畿内都京のように理想的な「四神相応」の土地には及ばない。何故、平泉の場合「四神相応」といわないで、「四神具足」といったのか不明であるが、その相異に大きな意義はないかも知れない。それというのも、すでに「四神相応」に正しく匹敵する土地を「四神具足地也」としている実例がある。

その例をここに掲げると、聖徳太子伝の『太子伝玉林抄』巻十二（十一冊一〇オ・ウ<sup>(34)</sup>）に

陰陽書云、左青竜者、從東水南流也。前朱雀者、南池溝在之。右白虎者、西大道在之。後玄武者、後山岳在之。凡東下南西北  
高大吉也。此云四神具足地也云々。（文字は筆者が現代的に書き改め、傍点も附した）

とある。

平泉の四周は右に掲げたような地形環境であろうか。平泉都市の立地環境を素直に観察すれば、右に掲げたような条件に適合しないが、敢えて解釈すればいろいろと理屈を付けることは可能である。

#### 円隆寺古鐘銘による平泉の位置

藤原・平城・平安の諸都京は、天子南面といわれる如くに、南が主要方位になっている。事実、右の項に掲げた『太子伝玉林抄』の四神具足の説述の場合も、南が主方位であって、南に向って左（東）と右（西）に分けている。

これはビルマのマンダレー王宮の場合とは主要方位は異なるが、ビルマでは東を主方位として東に向かって右（南）と左（北）に分けるのと相通ずる。これはいずれも宇宙を四分する原理であって、四方形という幾何学的形象は宇宙を象徴するものである。ヒンドゥー教にしても、仏教にしてもその教説には世界は東西南北の四方に展開するものであるという表象がみられる。したがって世界は四部分より成るものと観念されていた。別稿においても論じておいたが、アジア都城の象徴的構図は「有核的四分」の観念構造を有する。この構図が地理的事実と適合していない場合があるが、観念上「有核的四分性」を象徴する構図を呈するように配慮している<sup>(36)</sup>。平泉の場合も「供養願文」によると四禽図に適うように配置しており、『吾妻鏡』によると東を正方に設定していることは既述した。なお再び説述するが、作成時代は異なるけれども「平泉古図」・「骨寺古図」・「毛越寺古図」・「中尊寺山内古図」のいずれもが申し合わせたように西を天にして描写している。すなわち東から望んだことになる。しかも前述したが、金色堂は東向きであり、また『吾妻鏡』によると、奥州藤原一族の居館の本拠である「平泉館」（三五五頁）の位置を示すのに金色堂を基準にして正方にあるという。すなわち東方を指すのであるが、正確には東南東に当たると。「平泉館」の近くにある秀衝建立の無量光院（新御堂）もやはり東より少し南向きである<sup>(36)</sup>。

しかしながら、二代目基衡が建立した毛越寺は南が正面になっている<sup>(37)</sup>。そうすると、平泉における主要方位は混乱していたように思える。事実『吾妻鏡』のなかでは方位の混乱錯誤がある。これについては後述する。もし主方位である東方と南方とを錯誤していたとすれば、四神相応の解釈も甚しく異なってくる。高松塚石槨の壁画をみて、東に青竜、西に白虎、北側に玄武が画かれ、方位と四神の関係は明確に描写され、四神思想の原則が守まれている。その石槨の南側の朱雀は不明である。当初から画かれなかったのか、土砂流入により漆喰が剝落したのかは定か

でないが、四神思想表現の原則は崩れていないのである(38)。

さて、毛越寺の位置選定について述べよう。医王山毛越寺の金堂を円隆寺といい、前面に中ノ島を浮べた大泉池を臨み、その正面に南大門が位置する。その金堂は両脇に東廊と西廊を鉤型に正面方向の南に突出し、東廊の前端部に鐘楼があつた(39)。この鐘楼に一二二四年(貞応三年Ⅱ元仁元年)三月に製作された(39)といわれる大鐘があつたといふ。しかしこの鐘も今はない。

その古鐘銘(40)によると、

左青竜東河流、右白虎西有大沢、前朱雀前有北森、後玄武後在山巖、  
寺名円隆、建奥州中、白虎走西、青竜翔東、玄武遍列、朱雀方冲(後略)(句読点は筆者が附し、文字の一部も現代的に書き改めた。)

とあつたと『平泉志』巻之下(二六・二七頁)に記載されている。

この古鐘銘によつても、四神相応の土地を選定して毛越寺を建立していることが窺われる。四神相応の瑞相の土地とは、前述の『太子伝玉林抄』にも説述されていたように、東に河川、西に大道、南に湿原、北に山地を控える地相をいう。しかしこの毛越寺古鐘の銘文によると、東に河が流れ、西に大沢があり、南に北森、北の背後に山岩があるといふ、西と南の地相がやや理想とは異なる。なお続いて、毛越寺円隆寺は奥州の中央に建立され青竜東を翔く、白虎西を走り、玄武遍く列なり、朱雀方に冲しの相を呈すという。なるほど東は北上川が流れ、南は狭いが平地であり、背後の北側に山地を控える。ただし西に大道はないが、銘文の冒頭に銘記するように、西に大沢ありというのは臨地調査によると字名であつて、大沢集落を経て、金色堂に向ふことが可能であつたり、衣川に通ずることも出来

る。毛越寺は四神相応の地相といえるとしても、中尊寺の場合、あるいは「平泉館」を中心とした平泉の場合も四神瑞相の土地というには躊躇することなくいえるであろうか。それに中尊寺の場合、東方が正方位であるから、毛越寺のように南が正面である場合とは「有核的四分」の原理は共通するが、四神の認識は異なる。しかしいづれにしても、中尊寺は「計当国中心」りて建立し（『吾妻鏡』三三三頁）、毛越寺は「建奥州中」（『平泉志』巻之下 二七頁）というのは幾内政府が各国の中心に国分寺国分尼寺を建立して国家鎮護と奉平安穩を祈願した主旨と相通するように思われるし、また事実、「願文」を通覧しても平泉政權は奥州の鎮護を祈願しているのである。

#### 神社の位置と方向錯誤

平泉には伽藍建立は多いが、清衡は神社の勧請も忘れていない。

『吾妻鏡』文治五年九月十七日の条、「関山中尊寺事」（三三三頁）の項に

鎮守即南方崇<sub>レ</sub>敬日吉社、北方勸<sub>レ</sub>請白山宮。（漢字は筆者が書き改めた。）（三三三頁）

とある。すなわち関山中尊寺の南に日吉社を、北に白山宮を勧請した。後者と同称の神社は今も金色堂の約二二〇m北方やや東よりに残る（五〇〇〇分の一 国土基本図X—EX—65参照）。「平泉古図」によると、日吉社は金色堂（光堂）の南西に、白山社は北方に鎮座する。両者は以前から平泉の地主権現として何処かに鎮座していたものを中尊寺建立とともにここに勧請したのか、それとも平泉以外の地から勧請したのかは不明である。

また同じ条の「毛越寺事」（三五四頁）の項に

鎮守者、惣社金峯山奉<sub>レ</sub>崇<sub>二</sub>東西<sub>一</sub>也。

とあり、毛越寺において、鎮守は惣社金峯山きんぶせんを東西に崇め奉った。平安時代になると、神道と仏教の交渉は盛んとなり、仏教擁護のために伽藍境内に神祇を勧請して鎮守社とした。中尊寺も毛越寺もそれと同じ傾向にあったのであろう。

なお同じ九月十七日の条、「鎮守事」(三五四頁)の項に、

中央惣社、東方日吉・白山両社、南方砥園・王子諸社、西方北野天神・金峰山、北方今能野・稻荷等社也。悉以模ニ本社之儀。  
(句読点は筆者が附し、文字も現代的に書き改めた。)

と記されている。これは平泉の鎮守社の説述であって、前二項の鎮守は寺院境内の守護社と解すべきであろうか。本項の鎮守の記事によると、中央に惣社が鎮座し、その周囲東西南北に上方本社よまほひの儀を模して勧請している。

このように平泉の東西南北に神祇を勧請していることは、平安京の鎮護のため四至に石蔵・妙見寺(靈巖寺)・大將軍社を勧請している(4)のと相通するよう思える。

「中尊寺」項目の日吉・白山と「鎮守」項目のそれらとが同一社であるとすれば、以前から平泉に守護鎮座した地主権現ではなく、勧請社であることになる。また同一神社であるとすれば、中央に座した惣社の位置が平泉の西に存在することになる。また「毛越寺」項目の金峯山きんぶせんと「鎮守」項目の金峰山とは同一社なのであろうか。もしそうであるとするならば、「鎮守」項目に記述されている鎮守社の位置関係が合わないことになる。果して『吾妻鏡』に記載されている神社の位置関係は正確なのであろうか。それとも同名異社の神社であらうか。

方向表現については、『吾妻鏡』に気になることがある。

文治五年九月二十七日の条(三五八頁)に、

已上八人男女子宅並軒、郎從等屋田門、西界於白河関、為三十余日行程。東挾於外浜乎。又十余日。当其中央遙開関門。名曰三衣関。(句読点・傍点は筆者が附し、漢字も現代的に書き改めた。)

と記述されている。これによると、実際には南にある白河関を西、北方にある外ヶ浜を東と記しているが、これは明らかな誤記である。しかし当時の方位錯誤によるものであるのかも知れない。度々いうが、『吾妻鏡』に金色堂の東方を指して「正方」というのは、方位錯誤によるものであろうか。そうすると、金色堂は南方に向って建立したと錯覚していたのであろうか。もし錯誤したままで、中尊寺の四神相応瑞相の土地を想定したとしても、率直にいつて瑞相の地とはいえない。もっとも北上川は東稻山(たひね山)の駒形、長部(ながべ)の山麓の西を流れていたので、方位錯誤の南方(実際の東方)一面に沖積平地を臨んでいたことになる。しかし陰陽五行説の厳しかった当時に、そのような幼稚な誤謬を犯さなかったと考えたい。やはり、前述したように東を向くことに大きな意義があったのであろう。

仏教擁護のために神祇信仰もまた熾であった。なお、『平泉志』所収の「平泉図」によると、中尊寺本坊の西に妙見堂があり、また同誌巻之上(二三頁)によると、長部の山中に大將軍神を勧請している。これは平泉を開府した際に、平安京の將軍塚に模したのではないかと推察している。妙見堂や大將軍神が勧請されていたということは、すでに道教思想も導入されていたと考えてよからう。かかる宗教的な要素や知覚的要素の地域構成への影響については、すでに拙稿「都城的集落の機能と象徴」(本誌 二〇号掲載)に詳論したので、ここでは割愛する。道教が滲透していたのならば、当然のことであるが、陰陽五行思想・名山靈岳崇拜・星辰崇拜および方位信仰も熾となっている。それに加えて神道思想への影響も大きく、天照大御神崇敬に基づく太陽神信仰も昂揚した。それらの信仰が金色堂を核とする中尊寺仏教信仰と融合し、鎮護国家泰平安穩息災を目標としていたのである。

## 光は東から

『吾妻鏡』に東方を指して「正方」と呼んだのは、極く普通に考えて光は東から射し始めるからであろうと思う。これを当時熾であった陰陽五行説<sup>(42)</sup>によると、東は春であり、春は万物の発生する時で、生産の始まりである。そのため、東は貴なりともいわれる。

東向きに関連して、東北では注意すべき伝統的風習がある。東北地方では今でも家(単なる家屋のこと)をいうのではなくて、血統を主とする家系構成をいう)のことを「かまど」という。またいわゆる「竈」の向く方位が東向きか、あるいは辰巳の方向が吉であるといわれている。事実、福島県岩瀬郡天栄村字桑田に所在する奈良、平安時代の集落址である国造遺跡における竈の主軸方向を<sup>(43)</sup>見ても、東から南東に集中するのが一六基で北東に集中するものが、七基で、南に向くのが一基である。このように、今日の東北地方の伝承を裏付けるように、東あるいは南東に向く竈が多いのである。「竈」は食生活の中心であり、その中心となる火を神聖視し崇拜する拜火の宗教は祇教である。火の崇拜は世界の各民族とも盛んである。その教理は火・星・太陽は善の象徴であり、なおそれには農耕牧畜に精励することも含まれるのである。それは東北の風土に合っているように思える。拜火は祇教の影響によるものであろう。祇教の祭祀はすでに九三八年(天慶元年)、空也上人開祖の京都時宗紫雲山極楽院光勝寺(俗称空也堂)において開催されており、また京都愛宕神社も火神を祭祀する<sup>(44)</sup>。東北の竈の東向きを直ちに金色堂の東方Ⅱ正方とに関連があるというのではない。参考までに記しておく。

さらに、陰陽五行の配列秩序と地域空間内の摂理条理を合わせて考えてみる。そのうち特に相生五行の空間配列をみ

る(46)と、「土」を中心基盤にして、東に「木」が置かれ、東から南へ動き、南に「火」が配置され、西に「金」、そして北に「水」が置かれるという配列構成を形成する。この配列が狂ったり、間違ったりすると災禍があると考えられていたのである。その配列に照合して果たして平泉の都市構成はそれに適合しているであろうか。それについては容易に把握しえない。

『平泉志』巻之上(三、四頁)をみると、「金鷄山<sup>きんいざさ</sup>」という築山があるという。それは秀衡が造ったもので、その山容を富士山に擬し、高さ数十丈で、その山頂に黄金製の雌雄の鶏を埋めて、平泉の鎮護を祈願したという。また伝承によると、秀衡が漆一万盃と黄金一万を混合して土中に埋蔵し、子孫のために伝えたともいわれている。当時として一八〇mにも及ぶ丘を造成しえたであろうか。富士山に因む築山を造成したのは名山靈岳崇拜によるものであろうが、何故、「金」に因む伝承が平泉の西に存在するのかは不明である。その築山の位置については論定しえない。『平泉志』巻之上(三・四頁)によると、高館の南西に当たるといい、大森金五郎の「平泉古今推定図(46)」によると、毛越寺円隆寺の背後北西北西に座す山を指している。なお筆者の現地聴取によれば、拙稿「平泉新旧対照図(8)」に図示しておいたが、字「花立」の西部で、毛越寺・観自在王院の北の背後にあつたらしい。金鷄山が「築山」であつたか否かは今明らかにしえない(47)が、伝承として残存しているのは、平泉の西、字「立石」の大体北西方のようである。想像を拡大すれば、相生五行の空間配列に準拠して「金」の位置を配置したのか、それとも偶然であろうか。記して後考を俟つことにしよう。

しかも推定される金鷄山の東方に本鎮守(現在鎮守社跡)があり、その東方に伽藍御所・平泉館があり、さらにその延長上に河港玄関口の舟手関所が位置する。これも偶然であろうか。東に向って一直線にあるということが何か意

義があるように思える。

このように一直線上に施設建築物や記念物を配置することは珍しいことではない。ここに直接的な関係はないが、参考までに記す。インドネシアのジャワ中部にあるポロブドールには釈迦の伝記が浮き彫りにされ、五〇〇余の仏像が安置されているが本尊はない。それは東方三kmの地点に相對してチャンデイ・ムンドウットにある。なお、その中間にチャンデイ・パオンが建立されている<sup>(48)</sup>。それら三者が一直線上にあり、三者合わせて一寺院を構成しているのである。東に向って一直線上に配置されていることに注意したい。ここにおいても東方が主要方位になっている。前述したが、ビルマにおいても東方が主方位になっている。要するに具体的に把握しえないが、東向きに何か重要な意義がある。

#### 辰巳方位崇拜の想像と位置選定

方位の崇拜が古代人の精神生活のなかで、重要な分野を占めるのは、すでに本誌二〇号誌上に「都城的集落の機能と象徴」と題して私見を述べた。そのため詳論は割愛するが、国家の鎮護や生活の息災安泰を祈願するために、神や自然に摂理と条理が存在することを信じ、それに地上面の施設配置を斉整しようとした。その摂理・条理に反すれば災禍が発生すると信じた。そこでその摂理・条理に合うように地上の生活配置を象徴化し、その象徴を媒体として、人間が神と自然に接近しうるものと信仰したのである。

その一つには、冬至の日の出方位の信仰と位置選定の問題がある。この問題については、すでにその別稿において、冬至の日の出と夏至の日の出を望む位置、すなわち両者の方向の交叉する位置に一國の中核である国府の位置を

選定したのではなからうかと考えられることについて、常陸国国府の場合を推論した。かかる冬至日の出方位信仰と位置選定について、藤原、平城の両京の場合も考察を試みてみたが、大体同じような推論をえた<sup>35)</sup>。

冬至以降は陽気も回復し、日照時間も長くなってくるので、生産回復の方向として辰巳隅信仰が古代では熾であった。これは太陽信仰に基づく天照大神信仰の成熟により、生産霊の対象である日向信仰の辰巳方位を崇拜するようになってきたのである。また一方これとは全く逆の方向、すなわち夏至の日没の戌の方向と亥の方向を合わせて穀霊神信仰の対象となってきた。それに加えて太陽崇拜・星辰崇拜と道教導入による名山霊岳崇拜が重なって、日の出や日没方位を神聖視し、崇拜するようになり、その対象としてそれを見通せる方位に山岳を重ね合わせて拝みうる位置に重要な施設を配置し設置したものと推察されるのである<sup>36)</sup>。

そこで今因みに冬至、夏至の日の方位を算出することにした。それには  $\sin A' = \sec \phi \cdot \sin \delta$  の算出式を利用した。A' は東を基準とした角度（北が正）、 $\phi$  は緯度、 $\delta$  は太陽の赤緯である。この算出によると、平泉北方の胆沢城跡が位置する地点（緯度三九度一〇・五）で冬至の日の出は東を基準にして南へ三〇度九度であり、夏至のそれは北へ三〇度九となる。別の式による算出によると、冬至三〇度一〇度であり、いうまでもなく東より南寄りである。夏至は北へ三一度六八となる。同じく前述の式により多賀城跡がある地点（北緯三八度一八・二）では、冬至は三〇度五で、夏至は三〇度五であり、他の式によると、冬至は二九度七一で、夏至は三一度二四である<sup>40)</sup>。平泉の場合、金色堂の北一五〇mあたりを北緯三九度が通る。『理科年表<sup>50)</sup>』によると、北緯三八度で冬至の日の出は東を基準にして南へ二九度六、夏至は北へ三一度一であり、北緯四〇度では冬至は同じく南へ三〇度五であり、夏至は北へ三二度一である。そうすると北緯三九度では冬至の日の出は大体三〇度〇五で、夏至のそれは三一度六ということになる。平泉で

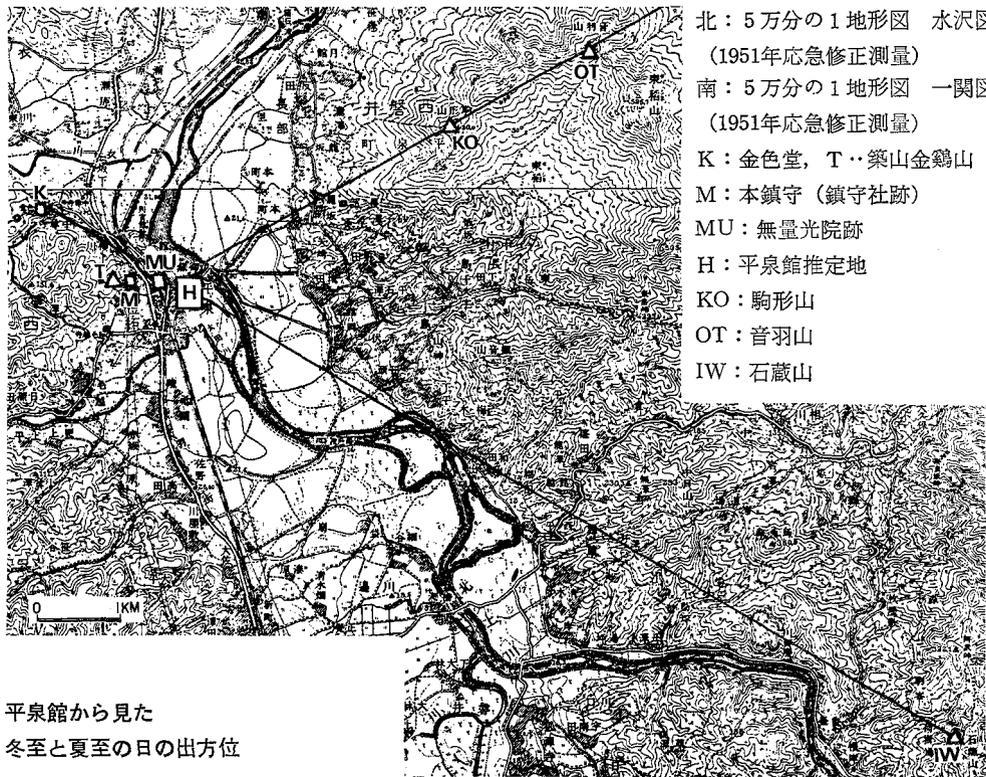
は大体東から南寄り三〇度が冬至の日の出方位であり、北寄り三二度弱が夏至の日の出方位である。

この方位角でもって、関山中尊寺の核的位置にある金色堂から見ると、大体冬至の日の出方向に奥州藤原一族歴代頭首の居館である「平泉館」（伽藍御所も含む）があり、さらにその方向に延長すると北上川を渡った左岸丘陵の石蔵山（三五六m）を望むことになる。この山は今の東磐井郡川崎村と一関市との境を形成し、狐禅寺地峡部左岸丘陵上にある。当時はこのように見通せる位置を意識して建築物を設置したのか、それとも偶然の結果なのかは明確でない。石蔵山という名称からしても偶然にしては名称に関係があり過ぎる。すなわち石蔵というのは、岩座・石座・磐座とも書き、神の座であり、神勸請祭祀の場である（翁）。またその山の頂上に神社が鎮座する。つまり石蔵山とは太陽神勸請の山であると解釈される。冬至の日の出方位は、前述したように生産霊の方位であり、神聖な方位である。したがってこの方位に向って常に祈願することは、平泉の豊饒を祈ることになり、延いては鎮護、息災、安泰を祈願することになる。したがって冬至の日の出方位⇓わかりやすく辰巳の方位を崇拜するために、その信仰対象として遠方の山岳を目標としたのではないかと思われる。このように山岳を信仰対象とするのは、道教が導入されて、名山靈岳崇拜が盛んになってからのことであろう。

平泉丘陵上の中尊寺からみる北上川対岸の東稻山山地は壮大である。京都の東山連峰とそれに関連する山地を想定してのことか。その山地一帯を東山といい、事実、今も東山（ひがしやま）という山地地名もあり、東山（ひがしやま）という町名もある。

さて金色堂と平泉館との位置関係については、度々説明したが、『吾妻鏡』文治五年九月十七日の条、「館事」（三五五頁）の項に、

金色堂正方、並于無量光院之北、構<sub>二</sub>宿館<sub>一</sub>、号<sub>二</sub>平泉館<sub>一</sub>。



とあり、金色堂の正方で、無量光院の東に平泉館があったことになる。その正方というのは冬至の日の出方位ということになるが、正確には「平泉館」の考古学的調査に俟たなければならぬ。今は「平泉古図」やその他の遺跡、たとえば無量光院遺跡から推定して「平泉館」の位置を考えたのである。『平泉志』の巻之上(二頁)によると「平泉館」は金色堂の正面に当たると記されており、やはり正方という方位を重要視したのである。

今度は逆に「平泉館」から金色堂の方向を見ると、冬至の日の出方位とは逆方向であり、大体夏至の日没の方位に当たる。これは戌と亥の方位で穀霊神信仰対象の方位であり、また祖霊、地霊の座す方位でもある。そうすると「平泉館」から見て、その方位に奥州藤原一族の祖先を祀る金色堂を配置したのは方位の意義に適合していることになる。

一方、「平泉館」から夏至の日の出方位を見ると、東稻山の北西で、音羽山(五三九m)の山頂付近から日が昇ることになる。また丁度手前の駒形山(四三〇m)と音羽山とを重ねて見通せる位置に「平泉館」を設けたことになるのである。これも名山霊岳崇拜によるものであろうが、音羽山という名前は北上川左岸一帯の山地に京都の東山を想定したことに因むのであろうか<sup>69</sup>。その名称の由来は不明であるが、偶然にしては合致する部分が多い。

結局、事実としていえることは、「平泉館」から見て冬至の日の出の方位に「石蔵山」が座し、夏至の日の出の方向に「駒形山」・「音羽山」が座す。つまりそれらの諸山を見通せる位置に「平泉館」を置いたということになるが、その真意は後考に俟たなければならない。なお、古来から蝦夷の信仰と駒形山とは深い関係があるように思える。

そのような位置関係は存在として事実であるが、その意義については想像の域を出ない。それにも拘らず敢えて想

像の見解を展開してきたのである。その意図については次項に私見をのべたい。論証に不備があり、拙論について種々の批評もあることを承知しているが、試論を説述することにしたのである。

### 本研究の現代的意義

本誌前号に掲載した別稿や本稿において論じてきた建築物や都城の位置選定や地域施設の配置を含めた地域空間組織の構成には、社会経済（生産構造も含めて）や政治的要因により編成されるが、それだけでなく知覚的な要因も不可欠であることを説述したのである。もっと素直に考えると、地域空間構成には息災安穩という人間本来の願望が精神生活の深層の根底にあつて大きく影響していることを否定しえない。

生産を基底にした現代の地域開発や地域編成が如何なる結果を招いているかは、今ここで多くを語る必要はなからう。その結果、人間本来の願望という一見平凡で素朴で、日常的なものが欠如していたことに気付き、当然のことが恰も新鮮な理念のように、災禍のない快適な生活基盤整備が叫ばれているのである。このようなことは遠古からの人間の願望であり、現代に始まったものではない。むしろ過去、特に遠古の昔の方が真剣に考えていた。そのためには地域施設の配置や地域編成を如何にするかということが重要な課題であつた。その当時のそれに対する人間の理念や知覚を把握することは極めて困難である。立証の材料も乏しいので、推論の域を脱しえないことになる。その立証のためには客観的資料や具体的証拠が不可欠であるが、知覚的内容は主観的なものが主体となる場合が多いので、それを客観的に把握しようとするには、主観の客観化という重大な問題が生ずる。したがって現代の社会科学はそれを避けて通れないので、知覚という内面から地域の諸現象を分析することに取組まなければならない。

現代の地理学が地域現象の社会経済的、生産的要因について精緻な分析を加えてきたことを認める。しかし、人間本来の願望であるとか、土地に対する観念であるとか、信仰とかといった精神生活の面からの追究は案外と取扱われなかったことが少なくないのではなからうか。そこで現代の地理学はその不足面を補充して地域の認識に努めるべきである。そのためには、地域社会は長い歴史の堆積によって形成されたものであるから、その中の人間の歴史的慣性を通じて考察することが必須となる。それに対し、筆者はまず歴史地理学の重要な基礎的作業である歴史的断片を復原し、その時の景観が形成された要因を究明するが、特に歴史地理学では究明が容易でなかった分野、すなわち古代人の文化的感覚、地域的認識と理解、土地に対する観念などの知覚的知識からまだ不備な手法とは知りつつも分析を試みたのである。いわゆる知覚的知識という内面から歴史的地域を分析しようとするのであるが、サワーが論ずる(53)ように、当時の文化を形成した人間集団の立場に自己をおいて、考察を進めなければならない。従前の歴史地理学の方法論的概念である地域の復原的考察や変遷史的考察に知覚的知識からの分析も加え、古代の歴史地理への発想の転換を図り、新しい歴史地理学の端緒だけでも見出せないものであろうか。

古代の場合、知覚的知識という内面的なものが要因となって、象徴的な景観を具現化している。これは単なる形態ではなくて、象徴であって、これが媒体となって人間と自然、此岸と彼岸、現実と理想が接近するものと古代人は信仰していたようである。したがって現代人の理性や合理性でもって理解しえない場合が多い。このようなことはすでにライトも論じている(54)ので、別稿「都城的集落の機能と象徴」において参照した。

さて筆者の言葉として、本誌前号の別稿と本号の拙稿とを合わせて古代の歴史地理研究の目標をいえば、つぎのように要約される。

自然のなかには、人間を遙かに超越した体系や神意に基づく摂理や条理というものが存在すると古代人は信じていた。その体系や摂理条理に沿うように、斉整主義を尊重して地域施設や建造物を配置し、また社会構造までもそれに合致させようとした。その上、地域空間内の生活行動をその摂理や条理に当て嵌め、さらには地域空間の構成や統一の組織を直線的、直角的配置によって観念的に形成させようとしたのである。これが理実の人間の安泰と平穩および息災に繋がるものと古代人は信じていたので、これを基盤として古代の土地（地域）と人間との関連を究明しようとするのが筆者の狙といえる。

### 結語にかえて

本稿の冒頭にも述べたように、本稿で「平泉古図」そのものの吟味検討を加えようとするのではない。それについては先学の研究を参考にし、その古図の描写から地域空間構成の理念を推論し、それを通して当時の地域空間形成の認識を究めようとするものである。しかしそれに接近しえただであらうかと懸念している。

(一) 「平泉古図」を基盤にして、『吾妻鏡』やその他関連史料および考古学的調査資料を合わせての考察の結果、平泉丘陵の頂部に関山中尊寺とその塔頭も建立し、それを核として東側の丘陵中腹から麓にかけて半圈状に奥州藤原一族の居館を配置し、その東側周辺部に家臣の集落（侍街）、その東側の北上川沖積平地に町屋を配置したように推察される。しかし北上川の沖積平地を空中写真で観察すると、流路の変遷が甚しく、また蛇行乱流が著しいので、その沖積平地に侍街や町屋が存在したのかと疑問が生ずる。それに北上川の狐禅寺地峡部を境として近くの上流部に氾水性洪水が甚大であり、常習的であるのに、平泉藤原政権時代に洪水が発生しなかったのであろうか。もし発生してい

たならば、沖積平地の町屋の存在は極めて危いものである。

なお、『吾妻鏡』によると、白河から外ヶ浜までの縦貫道路一町毎に金色の阿弥陀像を図絵した笠率都婆を建立し、その中心的位置に当たる平泉中尊寺に一基の塔を建てている。さらに、村落毎に伽藍を建立し、仏性灯油田を寄進している。

(二) 平泉都市の配置をみると、金色堂を核として塔頭地区、藤原居館地区、家臣住宅地区、一般庶民地区という半圏状の都市圏構造を展開していることになる。一方村落も寺院中心とした配置である。しかも奥州全域では平泉中尊寺を中心として南から北まで隈なく率都婆を建立したことは奥州藤原氏の奥州統一の形而上的表現である。

平泉都市の都市的性格については、平泉は寺院を中心にして、仏教信仰により発達した中尊寺門前町や宗教都市ではなくて、仏教理念に基づいて国家鎮護や奥州の泰平安穩息災を政治政策の基本方針として都市計画され、またその理念を基盤にして奥州の中央に建設された政治行政的都市である。なお平泉を中心にして奥州の地域計画を考慮し、農村部においても伽藍を中心とした村落構成の農村計画を考えていたようである。

(三) 仏教信仰とともに息災安穩を祈願するために、四神相応の自然の摂理条理に斉整する瑞相の土地を選定して中尊寺や毛越寺を建立している。そのみでなく太陽信仰に基づいて東方を正方として建築物を配置し、さらには冬至の日の出や辰巳隅信仰・戌亥隅信仰によっても地域施設を配置しているようにも想定される。なお平泉都市全体の配置については相生五行方位と合致するように配慮したのではないかとも思われる。

要するに、プリンスの歴史地理学における三つの知識類型(55)によると、右の要約の(一)は実存的知識体系による地域空間構成であり、(二)は抽象的知識体系のそれである。しかし、現在の研究はそれだけではなく、当時の人間が自然

環境を如何に理解し、認識していたか。またそれによって画いた心像はどのようなものか。なお自然を生活環境として如何なる感覚で、また観念で利用しているかを把握する必要がある。それらの把握の内容が当時の文化的意義内容であり、それを背景にして、地域の歴史的慣性のなかで人間が如何に地域を形成したかを理解することが歴史地理学では重要な課題となる。すなわちその課題の一端に属するのが、右要約の(三)であり、これは知覚的世界の知識体系の地域空間構成である。かかる地域の内面 $\parallel$ 知覚的知識をも通して見なければ、地域空間構成の真の姿を見ることが出来ないであろう。ここにいう(三)の分野から新しい歴史地理学の萌芽を育みたいと考えている。

#### 参考文献

- 菊池仁齡(一九一五) 奈良平安時代の奥羽経営 奉公会  
 日本歴史地理学会編(一九一六) 奥羽沿革史論 仁友会  
 大森金五郎(一九二九) 武家時代之研究 第二卷 富山房  
 朝日新聞社編(一九五〇) 中尊寺と藤原四代―中尊寺学術調査報告― 朝日新聞社  
 古田良一博士還暦記念会編(一九五五) 東北史の新研究 文理図書出版  
 古代史談話会編(一九五六) 蝦夷 吉川弘文館  
 高橋富雄(一九五八) 奥州藤原氏四代 吉川弘文館  
 朝日新聞社編(一九五九) 中尊寺 朝日新聞社  
 板橋源(一九五九) 中尊寺と藤原三代 東北出版株式会社  
 板橋源(一九六〇) 陸奥の産金と馬 地方史研究協議会編 日本産業史大系 三 東北地方篇 東京大学出版会 九―二三頁  
 板橋源(一九六一) 奥州平泉 至文堂  
 藤島玄治郎(一九六一) 平泉―毛越寺と観自在王院の研究 東京大学出版会

- 高橋嵩（一九六六）藤原秀衡 人物往来社  
 豊田武編（一九六七）東北の歴史 上巻 吉川弘文館  
 高橋富雄（一九六七）みちのくー風土と心 社会思想社  
 伊東信雄・高橋富雄（一九七〇）古代の日本 東北 角川書店  
 高橋富雄（一九七二）藤原清衡 清水書院  
 高橋嵩（一九七八）古代の地方史 第六巻 奥羽篇 朝倉書店

## 引用文献

- (1) 伊東信雄（一九六〇）天平産金遺跡 宮城県涌谷町 黄金山神社  
 板橋源（一九五二）陸奥国産金始源考 岩手史学研究 一〇号 二一―二九頁
- (2) 東京帝国大学文科大学史料編纂掛編纂（一九〇三）大日本史料 第四編之二 東京帝国大学 七八四―七八五頁
- (3) 西岡虎之助編（一九七七）日本荘園絵図集成 下巻 東京堂 三一頁 参考図 二 二三六頁 解説
- (4) 山田安彦（一九七六）水害発生常習地の歴史地理学的研究に関する課題 歴史地理学紀要 一八号 二五―五五頁  
 山田安彦（一九七五）明治以降における北上川治水の歴史地理学的分析に関する覚え書 岩手大学教育学部研究年報 三五巻 九七―一二三頁
- 山田安彦（一九七五）北上川の治水 森嘉兵衛監修・北上川 岩手放送株式会社 九六―一七七頁  
 山田安彦（一九七八）北上川 豊田武・藤岡謙二郎・大藤時彦共編・流域をたどる歴史 ぎょうせい 一五〇―一五七、一五七―一六六、一七三―一七九頁
- (5) 岩手県一関市（一九五二）水害復興誌 一関市役所
- (6) 吾妻鏡 文治五年九月二十七日の条（左記刊本三五八頁）。吾妻鏡については、黒板勝美・国史大系編修会編（一九七六）新訂増補国史大系 吾妻鏡 第一 吉川弘文館を参照した。本稿はこの刊本によった。以下、頁数で所在を示すようにした。なお、貴志正造訳注（一九七六）全訳 吾妻鏡 第二巻 新人物往来社も合わせて参照したので、ここに記しておく。

- (7) 山田安彦(一九七〇) 奥州平泉の都市遺跡 藤岡謙二郎編・地形図に歴史を読む 第二集 大明堂 三四―三五頁
- (8) 山田安彦(一九七五) 平泉 藤岡謙二郎編・日本歴史地理総説 古代編 吉川弘文館 二六七―二七〇頁
- (9) 高平真藤編(一九九二) 平泉志 堀内政葉発行 所収の「平泉古図」を参照した。
- (10) 石田一良(一九六四) 中尊寺建立の過程にあらわれた奥州藤原氏の信仰と政治 東北大学日本文化研究所研究報告 別巻 第二集 東北文化研究室紀要 通巻 第六集 平泉文化の研究 七三―七四、九三頁
- (11) 『平泉志』については、前掲(9)と一九三三年に東京の朝陽印刷株式会社印刷で中尊寺衣関の願成就院発行の二種を筆者は所有するが、ここでは前者を主として参照した。したがって、本文中に掲げる『平泉志』は前者であり、記述の所在は頁数で示すことにした。
- (12) 『平泉志』巻之上 一〇頁にすでに指摘済である。『平泉志』には『吾妻鏡』に「康保」というのは誤謬であり、あるいは「康和」を「康保」と誤記したのかも知れないという。  
 康保は嘉保(一〇九四―一〇九五)の誤字誤伝といわれてきたが、康保という字体から見て嘉保よりも康和(一〇九九―一一〇四)ではないかという説もある。竜肅(一九五〇) 奥州藤原三代の事蹟 日本歴史 二四号
- (13) 西岡虎之助編(一九七六) 大日本荘園絵図集成 上巻 東京堂 一一〇頁 陸中骨寺古図(その一) 二二八―二二九頁  
 同古図解説
- 伊藤信(一九五七) 辺境在家の成立——中尊寺領陸奥国骨寺村について——歴史 第一五輯 二八―四一頁
- (14) 山田安彦(一九七五) 中世奥州の農林業 藤岡謙二郎編・日本歴史地理総説 吉川弘文館 二六〇―二六三頁
- (15) 前掲(3) 三二頁 参考図 三 陸奥国毛越寺古図 二二六―二二七頁 同古図解説
- (16) 前掲(10) 九七―九八頁
- (17) 岡千曲(一九七六) 都城の宇宙論的構造——インド・東南アジア・中国の都城 上田正昭編・都城 社会思想社 三五四頁
- (18) 高橋富雄(一九七三) 奥州藤原氏四代 吉川弘文館 一八三頁
- (19) 吉田東伍(一九七〇) 増補 大日本地名辞書 七巻 奥羽 富山房 六九四頁
- (20) 山形県米沢市小菅の臨地調査は昭和五三年二月に実施。その際米沢市桜木町在住(当時 広幡小学校校長) 高橋勝郎氏に

種々お世話になった。誌土をかりて深く謝意を表す。

- (21) 中村忠雄解説(一九七四) 米沢古誌類纂——米沢事蹟考・米府鹿の子・米沢地名選——米沢古誌研究会 二、三七—三八頁

(22) 昭和五三年二月、高橋勝郎氏の御案内と御教示による。なお、脱稿後の同年一〇月にも踏査した。

(23) 岡博堂編(一九六六) 高橋賢治先生遺稿集 米沢市立図書館 六五—六六頁

(24) 高橋勝郎(一九七七) 広幡のむかし 米沢市高橋勝郎発行 四五—四六、二八五—二八六頁

(25) 率都婆については左記の文献を参照した

日野一郎(一九七六) 石塔 石田茂作監修・新版 仏教考古学講座 雄山閣 四九—五〇頁 笠塔婆

大護八郎(一九七七) 石神信仰 木耳社 三五九—三六三頁 道の神、六〇七—六一八頁 道しるべ、九二〇—九三二頁

石仏・如來。

(26) 統日本紀、天平二十一年二月二十二日・四月一日・四月十四日、国史大系編修会編(一九七六) 統日本紀 前篇 吉川弘文館一九七—二〇二頁

(27) 統日本紀 天平勝宝四年二月十八日、前掲(26) 統日本紀 前篇 二二三頁

(28) 延喜式 民部下 交易雜物 国史大系編修会編(一九七五) 延喜式 中篇 吉川弘文館 五九二頁

(29) 延喜式 兵部者 諸国器仗 国史大系編修会編(一九七五) 延喜式 後篇 吉川弘文館 七一〇頁

(30) 和島誠一(一九六七) 製鉄技術の展開 三上次男・橋崎彰一共編・日本の考古学 VI 歴史時代 上 河出書房新社 六一—八五頁

(31) 延喜式 主税 上「馱馬直法」 前掲(28) 延喜式 中篇 六六五頁

(32) 岩手県教育委員会編(一九五八) 奥州平泉文書 中尊寺 一一 天治三年三月二十四日 中尊寺供養願文 冷泉中納言朝隆卿筆巻卷 三一八頁 本稿ではこの刊本を参照した。本文中の所在頁数は本刊本の掲載頁である。

竹内理三編(一九六三) 平安遺文 古文書編 第五卷 東京堂 二〇五九 藤原清衡立願文案 中尊寺経蔵文書 一七八〇—一七八二頁

(33) 供養願文の解釈については、高橋富雄 板橋源、石田一良 新野直吉の諸論稿を参照した。

- (34) 法隆寺編(一九七八) 法隆寺蔵尊英本 太子伝玉林抄 中巻 吉川弘文館 三二一—三三二頁
- (35) 山田安彦(一九七八) 古代の都市的集落における地域空間構成の理念——おぼえがきとして——(一)、(二)、(三) 住宅金融月報 三一八号 四二—四九頁、三一九号 三八—四五頁、三二〇号 三八—四五頁
- (36) 文化財保護委員会編(一九五四) 無量光院跡 吉川弘文館
- (37) 藤原玄治郎編(一九六一) 平泉——毛越寺と観自在王院の研究 東京大学出版会 第一図 毛越寺遺跡・観自在王院遺跡 全域図参照。
- (38) 末永雅雄(一九七五) 飛鳥の考古学遺跡と高松塚 檀原考古学研究所編・檀原考古学研究所論集 創立三十五周年記念 吉川弘文館 一八一—三〇頁
- (39) 前掲(9) 平泉志 巻之下 二七頁
- (40) 前掲(9) 平泉志 巻之下 二六—二七頁
- (41) 故実叢書編集部編(一九五二) 新訂増補 故実叢書 一三回 禁秘抄考註・拾芥抄 明治図書出版 諸寺部 第九 諸寺 四三四—四三五頁
- (42) 古辞書叢刊行会編(一九七六) 原装影印版 拾芥抄 諸寺部 第九 諸寺  
陰陽五行については左記の図書を参考にしたので記しておく。
- 斎藤勳(一九七六) 覆刻 王朝時代の陰陽道 芸林舎  
鈴木敬信(一九六九) 曆と迷信 恒星社厚生閣  
日野九思(一九三八) 迷信の解剖 厚生閣
- (43) 大竹憲治(一九七八) 国造——福島県天栄村に於ける奈良・平安時代集落址の発掘 国造遺跡発掘調査団 一九九—一九四頁 竈の石材と主軸方向
- (44) 那波利貞(一九五六) 祇園祭祀小攷 史窓(京都女子大学史学会) 一〇号 一八一—一九頁
- (45) 山田慶児(一九七五) 空間・分類・カテゴリー 展望 二〇—二一頁
- (46) 大森金五郎(一九二九) 武家時代之研究 前掲参考文献 三三—三三頁
- (47) 『平泉志』 巻之上 の四頁によれば、「築山」は金鶏山を造山したのに因んだ名称であるというべきなのか否かは明確に

- していない。また同誌 卷之下 三二頁には金鶏山は伽羅御所に属する園地で造り山であるといひ、一名経塚山とよまう。
- (48) NDK取材班(一九七五) 未来への遺産取材記Ⅲ 壮大なる交流 日本放送出版協会 二〇八頁
- (49) 算出方法については、岩手県立教育センターの横沢一男氏の御教示を受けた。ここに誌上をかりて謝意を表す。
- (50) 東京天文台編纂(一九七六) 理科年表 四九冊 四九頁
- (51) 大場磐雄(一九四三) 神道考古学論攷 葦牙書房 一八五—二四二頁  
大場磐雄(一九七〇) 祭祀遺跡—神道考古学の基礎的研究—角川書店 三五—三九九頁
- (52) 音羽山(おとわやま)は京都府京都市山科区追分、滋賀県との境に座す標高五九三の山。中腹に牛尾観音や音羽の滝(布引の滝)があり、古来から歌枕となっている。  
また、京都市東山区清水寺東方の山で標高二四〇m。東山三六峰の一。清水寺の山号。
- (53) Sauer, C. O. (1941): Foreward to Historical Geography, A. A. A. G. vol 31~3. pp. 1~24.
- (54) Wright, A. F. (1965): Symbolism and Function, The Journal of Asian Studies, vol. XXIV~4, pp. 667~679.  
アーサー・F・ライト 奥崎裕司訳(一九六六) 象徴性と機能—長安及び他の大都市に関する考察 歴史教育 一四卷 一二号 一一二頁
- (55) Prince, H. (1971): Real, Imagined and Abstract Worlds of the Past, in Board, C., Chorley, R. J., Haggett, P., and Stodart, D. R. (ed.): Progress in Geography: International Reviews of Current Research, vol. 3. Edward Arnold. pp. 1~86.

本稿を草するに当たり、平泉中尊寺および周辺地域を度々臨地調査した際には平泉町役場の関係各位から懇切なる御案内と御教示を受け、また「平泉古図」の写真については同町役場観光課から提供していただいた。一方米沢市小菅の調査には、米沢市役所や米沢市立図書館の関係各位および米沢市広幡小学校校長高橋勝郎先生からも親切な御案内と御教示を賜わった。

なお、ここ拾数年来折にふれ、数々の貴重な御助言を下さった岩手大学名誉教授板橋源先生を忘れることは出来ない。それ最近では千葉大学名誉教授神尾明正先生からは神道考古学について、また千葉大学古谷尊彦助教教授からは地形学の分野について御教示を受けている。それら多くの方々に本誌上をかりて深く謝意を表す。